

〈論 文〉

改善要求の場面における働きかけ方略の対照研究

—日本語母語話者とウクライナ語母語話者の大学生の場合—

ザブランナ オレスタ

1. 本稿の背景および研究目的

1.1 はじめに

相手を動かして特定の行動をさせようとする言語行為は言語生活で重要な位置を占めており、発話行為理論 (Searle 1979; 柏崎雅世 1991; 熊取谷 1995; 山岡 2008)、対照語用論(Blum-Kulka, 他 1989; 『日本語学』 特集 依頼表現 10-14 1995)、第二言語習得論 (柏崎秀子 1993; 猪崎 2000; 守屋 2002)、社会言語学 (井出、他 1985; 熊谷 2000; 熊谷・篠崎 2006)等において多面的に研究されている。

働きかけ行動を発話行為の観点からみると、《依頼》から《命令》までのバリエーションがみられ、指示型発話行為として括ることができる。実際の言語使用場面では、《依頼》、《命令》といった主要かつ典型的な発話行為がなされる場合もあれば、その両行為の中間的な特徴を持つ言語行為がなされる場合もあるのだが、後者は今なおあまり注目されていないと思われる。そのひとつが、《改善要求》である。

本稿では、同等の立場にある相手に対して行われる《改善要求》に着目し、日本語母語話者およびウクライナ語母語話者の行う働きかけの仕方の異同を探ることとする。

1.2 日本語の指示型発話行為にみられる働きかけの特徴

《改善要求》は《命令》、《依頼》という言語行為の仲間であり、話者が相手に特定の動きをさせようとしているという点で、共通する目的を持っている。《改善要求》に関する研究を概観する前に、日本語母語話者とウクライナ語母語話者の指示型発話行為の実現の全体的な特徴が指摘されているいくつかの先行研究を取り上げ、本稿の出発点となった問題を提示する。

相手に行為を要求する日本語の定型表現として、行為が直接求められる「～てください」および行為が間接的に求められる「～いただけませんか」のような授受動詞の肯定形・否定形を用いる疑問文がある(柏崎秀子 1993)。

行為が直接求められる「～てください」の使用は《依頼》にはあまり見られず、《命令》にはほぼ限定されるという考え方が一般的である(熊取谷 1995:14)。柏崎雅世(1991)は指示型表現として「～てください」をとりあげ、その機能を詳細に分析している。柏崎雅世(1991)によると、「～てください」に依頼機能があると言えるのは次の場合のみである。それは「助けて下さい」、「お話を聞かせてあげて下さい」のように話し手あるいは他者に

向かう方向性を持った動詞・補助動詞が用いられるとき、「書いて下さい」のような自己完結的な動作の指す動詞が用いられる場合で「私のために」ないし「私の代わりに」が共起するときである（柏崎雅代 1991:89）。

また、一般に日本語の依頼・要求発話行為では、授受動詞の肯定形・否定形のある疑問文を定型表現としている。柏崎秀子（1993）は、日本語母語話者と日本語学習者に対して、それらの表現使用実態調査を行った。その結果、依頼・要求の場面において、定型表現だけでなく、むしろ話し手側の状況・目的・願望や場面の状況及び主題などに言及している表現が用いられ、聞き手の推論に委ねる場合が多いことが明らかになっている（柏崎秀子 1993）。

以上からわかるように、日本語母語話者の指示型発話行為においては行為を直接求める形式を用いる場合は限られており、相手の行為を質問形式で間接的に求める表現ならびに自分側の状況・目的・願望を相手に提示して行為を遂行させようとする場合が少なくない。

1.3 ウクライナ語の指示型発話行為にみられる働きかけの特徴

ウクライナ語では、日本語に比べて行為が直接求められる命令形がより幅広く用いられている。指示型発話行為の形式を分析した Dmytrenko (2009) に挙げられている例を見る限り、命令形は《命令》、《忠告》のみならず《依頼》、《助言》にも広く用いられている。

命令形の用法が多岐にわたることは、ウクライナ語のみならずスラヴ諸言語にある程度共通する特徴であると考えられる。その幅広い用法について最初に指摘したのは、ウクライナ語と同じくスラヴ語族に属するポーランド語について研究した Wierzbicka (1985) であった。そこでは、命令形による依頼・要求がニュートラルであることが、英語との違いとして主張されている。のちに Mills (1992) も、命令形がロシア語において最も好まれる依頼・要求の表現であると、同様な見解を示している。

Wierzbicka (1985) はまた、働きかけにおける相手の愛称、対象物の指小辞の使用を指摘し、話者が直接的な要求のインパクトを軽減すると述べている。そうすると、要求を軽減する手段は述部の外側にあるという前提があると言えるであろう¹。本稿では、それを踏まえた上で、要求の発話文の述部の語彙自体にも着目し、その特徴の記述を試みる。

1.4 《改善要求》という発話行為

《改善要求》という発話行為は、ほかの指示型発話行為と異なって、話者は相手に特定の行為を求める権利があるということを確信している (Apresjan 1969)。一見、《命令》との区別が難しいが、その相違点は次のように説明できるであろう。《命令》の場合、話者は相手に比べて社会的に優位な立場に立つという条件があるが、《改善要求》では力関係は本来必然的な条件ではなく、相手に特定の行為を要求する権利は、相手によって引き起こされた不都合な状況から生じる。例えば、足を踏まれたとき、漏れた書類を提出されたとき、

¹ 日本語に関してもこのような考えが一般である（例えば、山岡、他（2010）が挙げられる）。

話者は相手の行為のせいで被害を被っており、行為を求める権利があると言える。

山岡（2008）は《改善要求》が広義の《依頼》の一種であると主張しながら両者の違いについて次のように説明している。「《依頼》は利害ゼロの状態からプラスの利害（利益）を得ようとするものであり、《改善要求》はマイナスの利害（不利益）の状態からゼロに戻そうとするものである」（山岡 2008:92）。話者は強く行為を求め得る立場にあるが、それが働きかけの仕方によつてどのように現れているかを見る意義があるであろう。

1.5 《改善要求》に関する先行研究

明確に《改善要求》の特徴に着目した研究としては、山岡（2008）及び牧原（2008）の研究が挙げられる。

山岡（2008）は発話機能論の体系化に向けて、《改善要求》の機能を果たし得る発話を整理している。山岡（2008）は、《改善要求》には《依頼》としても機能する発話機能（1「遂行」2「命令」3「意志要求」4「意志誘導」5「可能要求」6「許可要求」7「願望表出」8「感情表出」と、《改善要求》のための間接的な発話機能（9「感情表出」10「状態描写」）が用いられているとしている²。牧原（2008）は、《不満表明》および《改善要求》における配慮行動に注目しているが、《改善要求》の基本的なストラテジーも区別している。そのストラテジーは、①「自分の不利益を告知する」、②「不利益をもたらしている相手の行為を告知する」、③「期待される望ましい事態を反実仮想として告知する」、④「不利益によって引き起こされた不満の感情を表明する」、⑤「行為の改善を要求する」という5つである³。それぞれの分類は異なっているが、いずれにせよ2つのグループに大別できると思われる。

1) 行為が求められる表現 → 山岡（2008）はそれらを1,2,3,4,5,6,7,8と細分類しているが、牧原（2008）は③「期待される望ましい事態を反実仮想として告知する」と⑤「行為の改善の要求」のみに分けている。

2) 行為の要求がない表現 → 牧原（2008）は①「自分の不利益の告知」、②「相手の行為の告知」、④「不満の感情の表明」に分けているが、山岡（2008）は9「感情表出」と10「状態描写」とに分類している。

語用論的な観点からいえば、第一のグループは、話者が相手にしてほしい行為を言語化

² 山岡（2008）が挙げている発話機能の例：1「遂行」（駅まで迎えをお願いします）、2「命令」（駅まで迎えに来てください）、3「意志要求」（駅まで迎えに来てくれますか）、4「意志誘導」（駅まで迎えに来てくれませんか）、5「可能要求」（駅まで迎えに来てもらえますか）、6「許可要求」（駅まで迎えに来てもらってもいいですか）、7「願望表出」（駅まで迎えに来てほしいんです）、8「感情表出」（駅まで迎えに来てくれると、ありがたいんですが）、9「感情表出」（冷房が効きすぎて寒いです）、10「状態描写」（あなた、私の足を踏んでますよ）、（ちょっとうるさいんですけど）。

³ 牧原（2008）が挙げているストラテジーの例：①「自分の不利益を告知する」（聞こえないんですけど）、②「不利益をもたらしている相手の行為を告知する」（うるさいよ）、③「期待される望ましい事態を反実仮想として告知する」（もう少し静かにしてくれるとうれしいんだけど）、④「不利益によって引き起こされた不満の感情を表明する」（あー、イライラする）、⑤「行為の改善を要求する」（静かにして、静かにしてくれる？）。

するようなタイプの働きかけから成っており、第二のグループは、望ましい行為への言及なしに状況のみを相手に提示するタイプの働きかけから成っていると考えられる。改善要求において相手にしてほしい行為が言語化されるか否かは、働きかけの仕方を特徴づける大きな要素であると考えられる。しかし、このことについて、具体的な場面における日本語母語話者の使用頻度の高い改善要求ストラテジーを観察した論文は、管見の限り見当たらない。

また、望ましい行為への言及がある場合、行為が直接求められている表現であるか、質問・意見の表出などの形式で間接的に求められている表現であるかという相違も明確にする必要があると思われる。

1.6 本稿の目的

本稿の目的は、対照語用論の観点から、日本語母語話者およびウクライナ語母語話者の行う《改善要求》の機能を担う発話文の言語形式、その述語の動詞の語彙的な特徴を考察し、働きかけの方略の異同を明確にすることである。

2. 調査の概要

2.1 場面の設定

本稿では、同じ集団に所属する、同等の立場にある相手に対する《改善要求》を取り上げることにする。相手が同等であるという設定は、力関係の不釣り合いによる干渉を取り除くためである。また、同じ集団の比較的親しい相手に改善を求めることには、話者が相手との良好な関係を維持したいという動機があると考えられ、《依頼》に近い《改善要求》になると言える。これについて研究することは、対照語用論の理論上の意義のみならず、外国語としての日本語およびウクライナ語の教育にも示唆的であると思われる。

《改善要求》の場面として、共同の作業において相手が自分の担当部分をし忘れたため不都合が生じ、そのためその相手に改善を求める必要が生じるという状況を設定した。

その詳細は、稿末に付録として示したスケッチの資料も参照されたいが、以下の通りである。2人の同期の学生が部活で茶碗を片付ける作業をやっている。1人は茶碗を箱に入れてフタをしめ、もう1人はそれを棚にしまうという役割分担をする。1つ目の茶碗は問題なくしまえたが、2つ目では、棚にしまう人はフタが閉まっていない箱を渡されたので、相手にフタを閉めるよう動作の改善を求める。

この場面において、相手の行為によって話者が被る被害の度合いは低いとはいえ、相手の行為が自分の作業（箱を棚に入れる）の妨げになるという意味では被害を被っており、ここで相手に動作を求めることは本質的に《改善要求》である。

2.2 調査方法

日常生活で多数の話者がまったく同じ状況に遭遇するという場面は限られている。その

ため、状況を統一し、その状況の下で話者の行う言語行動のパターンを観察するためには、自由会話の収集ではなく、談話完成テスト(DCT)やロールプレーという方法がよく用いられる。この方法には上述の利点があるものの、欠点がないわけではない。すでに指摘されているように、DCT では話者同士の相互作用で発展していく談話は収集不可能であるのと、DCT およびロールプレーで被験者が提供する表現を私生活においても用いるかどうか疑問であるという2点である (Boxer & Cohen 2004)。

しかし、本調査では、母語話者の頭の中に存在するスキーマを明らかにするのが目的であるため上述の短所があるものの、DCT 法を本稿の目的に合った方法として採用することにした。ただし、状況が被験者にことばで説明される従来の DCT ではなく、スケッチ談話完成テスト(Cartoon Discourse Completion Test)を用いることにした。そうすることによって、1) 被験者に十分な文脈を提示することを可能にし、2) ことばによる説明が被験者のアウトプットに与える影響を排除した。その方法を積極的に取り入れた Yoon & Kellogg (2002)によると、被験者からより精密な回答を誘発できるという肯定的な報告がなされている (Yoon & Kellogg 2002)。

2.3 被験者

調査の対象となった被験者、調査時期は次のとおりである。

日本語母語話者(JJ) —東京在住の大学生(学部生、院生)

37名 (男性:9名、女性:28名)

18~30歳 (平均年齢22.7歳)

日本語で書かれたスケッチ用紙による日本語での回答

ウクライナ語母語話者(UU)

—リヴィウ(ウクライナ西部の都市)在住の大学生(学部生、院生)

37名(男性:5名、女性:32名)

18~30歳 (平均年齢20.8歳)

ウクライナ語で書かれたスケッチ用紙によるウクライナ語での回答

調査時期:2009年6月~11月

2.4 調査手続き

調査を始める前に、被験者にそれぞれの母語で調査の目的を説明し、同意を得た。口頭で次の留意点を伝えた。

- ・提示するスケッチは、イラストではありますが、実際に起こった出来事という想定で状況を考慮し、登場人物「みやび」(ウクライナ語の場合「Natalja」)になりきって、スケッチ13の吹き出しの中のセリフをお考えください。
- ・登場人物は被験者の言語の母語話者です。
- ・普段話しているような自然な表現の使用が望ましいです。発話の長さは問いません。

・スケッチを見ているときに状況などに関して質問があれば、調査者に尋ねても結構です。

その後スケッチを提示し、一つだけ空欄となっている吹き出しに発話を書いてもらった。その際、発話行為のタイプなどに関して指示をせず、絵で展開しているストーリーや前後の会話の助けによって《改善要求》の機能を果たす発話を考えてもらえるようにした。

2.5 分析方法

本論では対照語用論的な観点から依頼の分析枠組みを提唱している CCSARP プロジェクト (Blum-Kulka、他 1989) および依頼の場面における働きかけ方を研究している熊谷・柴崎 (2006) を参考に分析を行っている。その基準は以下の通りである。

(1) 機能的要素への分割とその分析

まず、《改善要求》のひとまとまりの発話を、「機能的要素」という「相手に対する働きかけの機能を担う最小部分と考えられる単位」(熊谷・柴崎 2006:22) に分割した。個々の機能的要素は、コミュニケーションの中で担う役割から大きく 4 つのコミュニケーション機能に分けられる。それは、話を始める【切り出し】、相手が引き起こした状況を提示したり相手に相手の行為を告知したりする【状況への訴え】、望ましい行為を相手に明確に促す【行動の促し】、そして相手に恐縮の意を伝えたり、要求の理由を述べたりして働きかけの印象を調節する【軽減補助】である。

さらに、各グループ内において、主に述語の形式を手掛かりに機能的要素の下位の分類を行った。日本語の分類にあたっては山岡 (2008)、柏崎 (1993) も参考にしたが、独自に命名したもの⁴もある。

(2) 主要行為部の抽出とその分析

次に、各発話の 1 つまたは複数の機能的要素から、働きかけの「主要行為部」(Head act) を区別した。主要行為部とは、発話の核であり (Blum-Kulka、他 1989:275)、当該言語行為を最も明確に実現する機能的要素である (“the most explicit realization of the request”) (Blum-Kulka、他 1989:276)。通常、【行動の促し】が指示型発話行為の主要行為部になっている。例えば、「財布を忘れてしまった。明日返すから、500 円を貸してくれない？」という発話の場合、「お金を貸してほしい」という意図は「500 円を貸してくれない？」に明確に現れ、それが主要行為部として採用される。ただし、【行動の促し】のない働きかけもある。発話が「財布を忘れてしまった……」のみである場合、明確な【行動の促し】はない。しかし、昼ごはんを食べようと友達と食堂に来た状況のなかでは、これで依頼になり得る。このように、【行動の促し】のない働きかけの場合、【状況への訴え】が行為主要部まで繰り上げられる。

以下、本稿の調査結果を例として用いると、(a) では【行動の促し】が主要行為部となる

⁴ これは「状況確認」、「状況の評価」、「現況のままでは行為を続けることの確認」、「注意喚起」である。

のに対し、(b) では【行動の促し】がないため、【状況への訴え】が主要行為部まで繰り上げられる。

(a) 箱のフタが開けばなしになっているよ。…花子ちょっと閉めてくれない? (JJ22)

【状況への訴え】

【行動の促し】→ 主要行為部

(b) 花子、箱のフタ閉まってないじゃん。 (JJ28)

【状況への訴え】→ 主要行為部

以下は、著者が試みた分析の手順である。抽出した主要行為部において、相手にしてほしい行為が言語化されるか否か、言語化されるのであれば、命令形などによって行為が促されているか、間接的な表現で促されているかという観点から働きかけの仕方を考察し、日本語母語話者とウクライナ語母語話者とでその使用傾向を対照させた。

(3) 述語の語彙的な特徴

最後に、それぞれの母語話者は相手にしてほしい行為に言及する際に、述語の動詞としてどのような語彙を選択するかを分析した。当該の行為が具体的に指し示されているか否かが分析の主な対象となった。

2.6 分析項目

このような方法で分析を行い、日本語母語話者およびウクライナ語母語話者の働きかけにおける次の点を比較対照した（それぞれを括弧内の節で考察する）。

- 《改善要求》の機能的要素の全体的な使用傾向（→3.1）
- コミュニケーション機能から見た機能的要素の組み合わせのパターン（談話構成）（→3.2）
- 【状況への訴え】の機能的要素の種類（→3.3）
- 【行動の促し】の機能的要素の種類（→3.4）
- 主要行為部からみた働きかけの仕方の特徴（→3.5）
- 述語動詞の語彙的な特徴と働きかけにおける役割（→3.6）

3. 結果と考察

3.1 機能的要素の使用傾向

日本語母語話者（JJ）とウクライナ語母語話者（UU）が《改善要求》で用いたすべての機能的要素を、コミュニケーション機能別に以下の表 1 に示す。あわせてその出現数も記す。

<表 1> 《改善要求》で用いられた機能的要素の全体像

コミュニケーション機能	機能的要素	JJの代表例	出現数	UUの代表例	出現数
切り出し	感嘆	あつ/あー/あれ/おつと	8	Oj (あつ)	6
	呼びかけ	ねえ花子 / 花子	8	Xrystju (名前) / Sonečko (ハニー)	20
状況への訴え	細分類→ 3.3節	フタ開いてるよ	23	Ty zabula zakryty cju korobočku (この箱を閉じ忘れてる)	12
行動の促し	細分類→ 3.4節	ちょっと箱のフタ閉じてもらっていい?	19	Zapakuj, bud' laska, korobku (箱を梱包しておくれ)	32
軽減補助	謝罪	ごめん	7	Probač (ごめん)	2
	理由の説明 ⁵	両手がふさがってるから	3	U mene obydví ruky zajnjati (両手がふさがってるから)	14
合計			68		86

このようにJJとUUで用いられているコミュニケーション機能の種類に差はないが、その使用傾向に相違がみられた。

【切り出し】では、UUには名前・愛称で相手に話しかける「呼びかけ」が多く用いられる。

JJは【状況への訴え】と【行動の促し】を同程度で用いるのに対して、UUは【行動の促し】をより多く用いる傾向にあると言える。この結果は、日本語話者の不満表明を英語話者との比較で分析し、日本語話者が状況を同定するというストラテジーを英語話者より多く用いるという藤森(1997)と似たような傾向を示している。

【軽減補助】に関しては、JJは謝罪を、UUは自分がなぜ行為を要求しているかという、相手の引き起こした状況と直接結びついていない理由を述べるという相対的な違いが見られた。

3.2 《改善要求》の談話構成

本節では、【行動の促し】および【状況への訴え】を中心に《改善要求》の談話構成の特

⁵ 「理由の説明」を【状況への訴え】と区別した理由は、後者と異なって前者は単独で《改善要求》になりやすく、【行動の促し】を補助するという点にある。

徴を取り上げる。《改善要求》は、【行動の促し】および【状況への訴え】の使用の有無によって、3つのパターンに分けられる。

【行動の促し】のみの《改善要求》

JJにも用いられるが、UUにより顕著にみられる特徴であると言える(JJの16件対UUの25件)。

- (1) ごめん、ふた閉めてくれる? (JJ4) ⁶
- (2) *Xrystyno, zapakuj, bud' laska, korobku.* (UU26)
 フリスティーナ(名)、梱包する.IMV、どうか、箱.ACC
 フリスティーナ、どうか箱を梱包しておくれ。

そのうち、UUの働きかけには【行動の促し】が重複するものもある。

- (3) *Xryste! Dopomožy. Zakryj, bud' laska, korobku,*
 フリーステャ(愛称)!手伝う.IMV. 閉じる.IMV. どうか 箱.ACC、
bo meni tjažko trymaty šuxljadu. (UU17)
 なぜなら 私 困難だ 持つ.INF 引き出し.ACC
 フリスティーナ、手伝って。私、引き出しが持ちづらいから、どうか箱を閉じておくれ。

【状況への訴え】のみの《改善要求》

これは、JJの半分近くにみられたパターンであり、UUにはそれほど多くない(JJの18件対UUの7件)。

- (4) フタ閉まってないよ。 (JJ1)
- (5) *Cja korobka pohano zapakovana.* (UU10)
 この箱.NOM 下手に 閉じられている.PSV
この箱は閉まり方が悪いよ。

そのうち、JJの働きかけには【状況への訴え】が重複するものがある。

- (6) あっ、これ開いてるけど、大丈夫? (JJ9)

【状況への訴え】と【行動の促し】の組み合わせの《改善要求》

両グループで最も頻度が少なかった(JJの3件対UUの5件)。

⁶ 事例で【行為の促し】部分を2重下線、【状況への訴え】部分を下線で示してある。

(7) あ、開けっ放した。閉めておこう。(JJ5)

(8) *Oj, ty zabula zakryty korobku!... Zakryj jij, bud'laska!* (UU25)

あっ、君 忘れた 閉じる.INF 箱 ACC. ... 閉じる.IMV これ どうか。

あっ、箱を閉め忘れてるよ。...閉じておくれ！

3.3 【状況への訴え】の機能的要素についての JJ と UU の比較

【状況への訴え】の機能は、好ましくない状況、あるいはその状況を引き起こした相手の行為を相手に知らせることにある。平叙文が最も多いが、行為・状況を確認する疑問文もここに入っている。【状況への訴え】には相手を動かす意図もあるが、相手にしてほしい行為についての言及はない。以下に、JJ および UU が【状況への訴え】として用いた機能的要素およびその代表例、分類の基準となった述語の形式を示す。分類の際、JJ の機能的要素に丸付き数字を、UU の機能的要素にアラビア数字を振って区別する。

<表 2> JJ の【状況への訴え】

機能的要素	代表例	言語形式 (述部)
① 状況提示	フタ開いてるよ。	自動詞のテ形 + ない/いる + よ/ わよ/ じゃん/ けど 自動詞の過去形 + ままだ + よ/わ
② 行為提示	フタを閉め忘れてるよ。	他動詞のテ形+ いる + よ
③ 現況のままでは行為を続けることの確認	このまましまっているの？	連用修飾語(様態) + テ形いい(の) +?
④ 状況確認	(開いてるけど)、大丈夫？	(主語 対象物) 形容詞 +?
⑤ 状況の評価	フタの開けっ放しはまずいかな	(主語 対象物) 形容詞 (+かな)

<表 3> UU の【状況への訴え】

機能的要素	代表例	言語形式 (述部)
1 状況提示	Korobka vidkryta. 箱.NOM 開けられている.PSV 箱が開いてるよ。	受動過去分詞
2 行為提示	Ty zabula zakryty cju korobočku. 君 忘れた 閉じる.INF この 箱.ACC この箱を閉じ忘れてるよ。	動詞過去形
3 行為を続けることの確認	Cju stavity nezakrytoju? これ.ACC 入れる.INF 閉じられていない PSV.INS? これ、閉じないままですまうの？	動詞不定詞+連用修飾語 (様態) +?

		Ty ščoś zabula?	
4	行為確認	君 なにか 忘れた? 何かし忘れてない?	動詞過去形 +?

「状況提示」、「行為提示」、「現況のままでは行為を続けることの確認」という機能的要素は JJ と UU とで共通しているが、JJ には状況視点の「状況の評価」ならびに「状況確認」、UU には行為者に視点の置かれる「行為確認」がみられた。

【状況への訴え】の機能的な要素の出現数は以下の通りである。

<表 4> 【状況への訴え】の機能的要素の出現数 (JJ と UU との比較)

機能的要素 話者	状況提示 ① 1	行為提示 ② 2	現況のままでは 行為を続ける ことの確認 ③ 3	状況確認 ④	行為確認 4	状況の 評価 ⑤	合計
JJ	15	5	1	1	—	1	23
UU	3	6	1	—	2	—	12

表 4 から明らかであるように、JJ は【状況への訴え】を UU に比べて多く用いる。そのうち、「状況提示」すなわち行為者なしに状況を相手に提示するのが JJ には最も多く、3 分の 2 弱を占めている (JJ の 23 件のうち 15 件①)。それに対して、【状況への訴え】は UU にはそれほど現れず、現れるにしても、状況というよりは相手の行為が問題とされている (2,3,4 は合わせて 12 件のうち 9 件となっている)。

3.4 【行動の促し】の機能的要素についての JJ と UU の比較

【行動の促し】というコミュニケーション機能を持つ機能的要素によって、話者は要求の意思を表明する。【状況への訴え】と違って、【行動の促し】では話者は望ましい行為にはっきりと言及している。JJ および UU の用いた機能的な要素は次の通りである。

<表 5> JJ の【行動の促し】

機能的要素	代表例	言語形式 (述部)
① 直接的要求	フタも閉めて。	他動詞のテ形 (+ね)
② 注意喚起	フタは今度からちゃんと閉めようね。	他動詞の意向形 (+ね)
③ 協力の尋ね	フタ閉めてくれる?	他動詞のテ形 + くれる? / くれ ない? / もらえる?
④ 相手行為のため の許可の尋ね	ちょっと箱のフタ閉めてもらって もいい?	他動詞のテ形 + もらって (も) いい?

⑤ 当為の陳述	閉めてくれないと。	他動詞の当為形
⑥ 願望の表出	ふた閉めてもらった方がいいな。	願望のモダリティの標識

JJの①「直接的要求」では、命令形が省略される親しい間柄における⁷行為指示表現「～て」が用いられている。②「注意喚起」では、話者は意向形を用いて未来の行為を呼びかけている。③「協力の尋ね」に入るのは、授受動詞の疑問・否定疑問形の尋ねである。④「相手行為のための許可の尋ね」は、相手の行為に対して相手に許可を求めるような複雑な表現である。砂川（2006:317）の説明を借りると、親しさを表しながら丁寧をお願いしたいという葛藤の中で、「～てもらえますか」がストレートすぎると感じる場合、他者の行為に対して許可の尋ね表現を選択するということである。

<表 6> UU の【行動の促し】

	機能的要素	代表例	言語形式 (述部)
1	直接的要求	<i>Začnyy, bud' laska, pačku!</i> 閉じる.IMV どうか 箱.ACC フタを閉めておくれ。	動詞の命令形 (+好意に訴える <i>bud' laska</i> (どうか))
2	行為の可能性の尋ね	<i>Ty ne mohla b zakryty</i> 君 NEG できる. IRR 閉じる.INF <i>korobku?</i> 箱. ACC? 箱を閉めてもらえない?	可能を表す補助動詞 + 動詞の不定詞 +?
3	自分行為の許可の尋ね	<i>Možna tebe šče na xvylynku?</i> 可能.IMPS 君.ACC もう 一分間? ちよっと (お願いして) いい?	許可求めを表す述語副詞 (遂行動詞の不定詞) +?
4	当為の陳述	<i>Treba začynyty korobočku.</i> 必要.IMPS 閉じる.INF 箱.ACC 箱を閉じなきゃ。	当為を表す述語副詞 + 動詞の不定詞

UUの「直接的要求」には、動詞の命令形が用いられている。2「行為の可能性の尋ね」では可能を表す補助動詞 *mohty*(できる)が用いられ、3「許可の尋ね」では自分の行為についての許可が尋ねられている。

ところで、JJおよびUUのいずれにおいても、「直接的要求」とそれ以外の機能的要素とでは語用論的な違いが存在する。前者では、話者は行為の遂行を相手に直接求めているため、相手には行為を行うかどうかという選択肢がなく、行為が一方向的に押し付けられている。一方、後者においては、話者は相手に行為について尋ねているか、行為の必要性を

⁷ 柏崎雅世 (1993 :88)。

述べているかであるが、行為を拒否するという語用論的な自由は相手に与えられている (Leech 1983:120)。前者では、命令形という、要求するための文法的な手段によって行動が促されているが、後者では、それ以外の表現によって行動が促されている。本稿では、命令形（あるいは命令形が省略された表現）を直接的要求と見なすのに対して、行為が要求されるそれ以外の表現を間接的要求と見なす。

【行動の促し】の機能的な要素は、頻度の観点からは次のようにまとめられる。

<表 7> 【行動の促し】の機能的要素の出現数 (JJ と UU との比較)

機能的要素 話者	a 直接的要求	b 注意喚起	c 協力の尋ね	d 行為の可能性の尋ね	e 相手行為のための許可の尋ね	f 自分行為の許可の尋ね	g 当為の陳述	h 願望の表出	b-h の合計
	① 1	②	③	2	④	3	⑤ 4	⑥	
JJ	2	2	6	—	6	—	2	1	17
UU	24	—	—	4	—	1	3	—	8

JJ の【行動の促し】として最も頻度が高いのは c 「協力の尋ね」と e 「相手行為のための許可の尋ね」である。一方、UU の場合、a 「直接的要求」が圧倒的に優先されている。

3.5 主要行為部からみた働きかけにおける JJ と UU の比較

ここまで《改善要求》を、【状況への訴え】、【行動の促し】の種類及びその使用傾向の観点からそれぞれ分析したが、本節では JJ と UU の《改善要求》の実現の特徴を一般化し、働きかけの仕方の観点から量的に比較する。そのために、2.5 節で説明したように、《改善要求》が最も明確に実現されている主要行為部を抽出し、そこで相手にしてほしい行為が言語化されるか否か、されているとすれば、直接求められているかどうかを分析する。その結果、働きかけは 3 つの型に分けられる。

「行動の直接的要求型」

行為の遂行が直接要求される【行動の促し】のタイプである。相手には行為を遂行するか否かという語用論的な選択の余地がなく、行為の決定権が話し手にある。「直接的要求」a がここに属している (JJ の 2 件対 UU の 24 件)。

(9) あ、フタも閉めて⁸。

「行動の間接的要求型」

相手にしてほしい行為が言語化される【行動の促し】が用いられるが、行為の遂行の決

⁸ 紙幅の関係で日本語母語話者の事例のみを示す。

定権は相手にゆだねられているタイプである。「注意喚起」b、「協力の尋ね」c、「行為の可能性の尋ね」d、「相手行為のための許可の尋ね」e、「自分の行為の許可の尋ね」f、「当為の陳述」g、「願望の表出」hがこのグループに入っている（JJの17件対UUの8件）。

(10) ごめん、できればフタ閉めてもらえる？

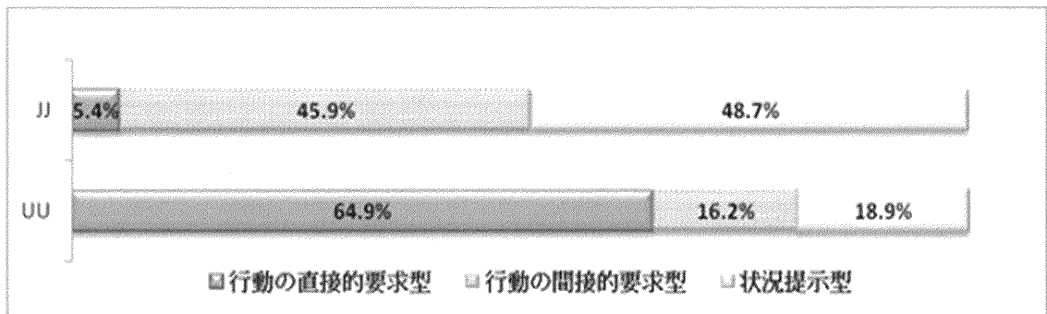
「状況提示型」

このタイプの働きかけの特徴は、話し手にとって望ましい行為が言語化されないということにある。つまり、どちらのタイプの【行動の促し】も伴わない【状況への訴え】のみから成る《改善要求》がこのグループを構成している（JJの18件対UUの7件）。

(11) 花子、フタが開いたままだよ。

それぞれの話者におけるこの3つのタイプの割合は、次のように表される。

<図1> 働きかけのタイプの全体的な傾向（JJおよびUUとの比較）



JJには「行動の直接的要求型」がきわめて少なく（約5%）、《改善要求》は残りの「行動の間接的要求型」と「状況提示型」で行われることがほとんどであるということが言える。それに対して、UUは約65%が「行動の直接的要求型」の働きかけをしており、「行動の間接的要求型」と「状況提示型」とでは差がほとんど見られない。したがって、それぞれの話者の優先順位は異なってくる。JJが「状況提示型」、「行動の間接的要求型」を同程度で用いて「行動の直接的要求型」をあまり用いないのに対して、UUはちょうどその逆の傾向を示している。

JJ：「状況提示型」および「行動の間接的要求型」を優先（「行動の直接的要求型」の使用は希）。

UU：「行動の直接的要求型」を優先（「行動の間接的要求型」および「状況提示型」の使用の度合いは低い）。

3.6 動詞の語彙的な特徴

以上、3.1 から 3.5 節で言語形式をもとに分析を行った結果、JJ と UU とでは働きかけの仕方に大きな違いのあることがわかった。

本節では、動作・状態を指し示す動詞に焦点を当てて述部の動詞の語彙に違いがあるか否かを考察する。

JJ の 37 件の働きかけのうち、具体的な動作を指し示す「閉める、閉め忘れる、閉じる、開く」以外の動詞が用いられたのは、1 件のみである。

(12) 茶碗をしまうときはフタを閉めておくのが大事なの。今度から気をつけてね。(JJ35)

それに対して、UU の 37 件の働きかけにおいては、具体的な動作・状態を指し示す *zачыныты*(閉じる/閉める), *zakryty*(閉じる/閉める), *zabuty zakryty*(閉じ忘れる)、*vidkryta*(開けられている)のみの働きかけは 22 件で、具体的な動作を指し示さない動詞が生起するのが、15 件もある。

そのうち最も多いのは、話し手に向かう方向性を持った *dopomohty* (手伝う/助ける) の使用である (11 件)。この動詞は補助動詞として述語の一部を構成する場合(*dopomohty zakryty*(閉じるのを手伝う))と、単独で述語になっている場合がある。

(13) *Xrystyno, dopomožy meni bud' laska.* (UU2)

フリスティーナ (名)、手伝う.IMV 私.DAT どうか。

フリスティーナ、どうか手伝っておくれ。

また、具体的な動作を指し示す動詞が省略され、本来の助動詞であるはずの動詞のみが用いられている働きかけも見られた。それは、*zabuty*(忘れる)のみによる「行為確認」(表 3 を参照)、*možna*(可能である)のみによる「自分の行為の許可の尋ね」(表 6 を参照)である。

4. 結論と今後の課題

本稿では、比較的親しい同等の立場にある相手に対する日本語母語話者(JJ)とウクライナ語母語話者(UU)の《改善要求》を総合的に比較した結果、次の結論に至った。

- ・ 働きかけの仕方からみると、JJ の《改善要求》にも UU の《改善要求》にも「行動の直接的要求型」、「行動の間接的要求型」、「状況提示型」の 3 タイプがいずれも現れる。
- ・ しかし、JJ と UU とでは優先される働きかけのタイプに偏りがある。JJ は「行動の直接的要求型」をほとんど用いず、状況を提示して遂行すべき行為を推測させる「状況提示型」を多く用いる。また、行為について相手に許可を求める、尋ねることによって行為に対する決定権を相手に委ねる「行動の間接的要求型」の使用頻度も高い。それに対し、UU は相手にしてほしい行為を直接求める「行動の直接的要求型」を優先的に用いる。つまり、

《改善要求》の場面において JJ は状況を提示し、UU は行為を直接求める表現を用いる可能性が高い。

・ 述語動詞の語彙的な特徴を分析した結果、JJ は当該の行為・状態を具体的に指し示すが、UU は行為を要求するものの、してほしい行為をはっきり指し示さない動詞（話し手に向かう方向性を持った動詞）を用いることが少なくない。

本稿では、一場面における《改善要求》の実現を調査したが、男女差、親疎関係、上下関係による変異は対象としていない。今後、場面の増加・社会的な変数の導入を検討し、結果をより一般化できる調査を行っていきたい。

また、本稿において、日本語母語話者とウクライナ語母語話者の《改善要求》を、用いられている機能的要素の分類とその使用傾向、主要行為部からみた働きかけの仕方、述語動詞の語彙的な特徴という観点から対照させたが、それぞれの言語の話者が選択する表現と、要求を和らげようとするという話者の意図との関連性を明らかにしておらず、今後はそれらをより明確にしたい。ただし、今の段階でも次の仮説が立てられると考えられる。

日本語母語話者の《依頼・要求》、《不満表明》に関しては、すでに指摘されているのと同様に（柏崎 1993; 藤森 1997）、《改善要求》にも行為を求める表現はあまり用いられない傾向があると言える。さらなる検証が必要ではあるが、今回の調査で得られたデータを見る限り、「状況提示型」は JJ の《改善要求》の最も一般的な働きかけの仕方であると考えられる。そして、「～てもらっていい?」、「～してくれる?」などの「行動の間接的要求型」の使用は《依頼》に近いもので、相手への要求を緩和したいという動機と結びついていると思われる。

一方、ウクライナ語話者の場合、スラヴ諸語においては命令形の使用が多いという先行研究の指摘通り（Wierzbicka 1985; Mills 1992）、本調査の結果においても命令形使用の《改善要求》が最も多くみられ、ニュートラルな表現として用いられていると思われる。ただし、UU は要求を和らげる手段として動詞の語彙的な選択を有効に行い、話者への方向性を持つ動詞、具体的な動作を指し示すとは言えない述語動詞の語彙を用いるという捉え方が妥当であると考えられる。

ウクライナ語の翻字一覧（伝統的な学術転写法を使用）

Aa=[a], Бб=[b], Вв=[v], Гг=[h], Ёё=[g], Дд=[d], Ее=[e], Єе=[je], Жж=[ž], Зз=[z], И=[y], Іі=[i], Її=[ji], Йй=[j], Кк=[k], Лл=[l], Мм=[m], Нн=[n], Оо=[o], Пп=[p], Рр=[r], Сс=[s], Тт=[t], Уу=[u], Фф=[f], Хх=[x], Цц=[c], Чч=[č], Шш=[š], Щщ=[šč], Ъ=[ʔ]（軟音記号）, Юю=[ju], Яя=[ja]

略号（Timberlake (2004) を参考に）

ACC 対格 DAT 与格 IMV 命令形 IMPS 非人称動詞/非人称述語副詞 INF

不定詞 INS 具格 IRR 仮定法 NEG 否定助詞 NOM 主格 PSV 受動分詞

《引用文献》

- 猪崎保子 (2000) 『依頼』会話にみられる『優先体系』の文化的相違と期待のずれ — 日本人とフランス人日本語学習者の接触場面の研究 — 『日本語教育』104 pp.79-88 日本語教育学会
- 井出祥子・萩野綱男・川崎昌子・生田少子 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動 — 大学生の場合 —』南雲堂
- 柏崎秀子 (1993) 「話しかけ行動の談話分析 — 依頼・要求表現の実際を中心に —」 『日本語教育』79 pp.53-63 日本語教育学会
- 柏崎雅世 (1991) 『日本語における行為指示型表現の機能 — 「お~/~/てください」「~/~/くれ」「~/~/て」およびその疑問・否定疑問形について —』くろしお出版
- 熊谷智子・篠崎晃一 (2006) 「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」 『国研報告 123 言語行動における「配慮」の諸相』 pp.19-37 国立国語研究所
- 熊谷智子 (2000) 「言語行動の分析の観点 — 『行動の仕方』を形づくる諸要素について —」 『日本語科学』7 pp.95-113 国書刊行会
- 熊取谷哲夫 (1995) 「発話行為理論から見た依頼表現 — 発話行為から談話行動へ —」 『日本語学』14-10 pp.12-22 明治書院
- 砂川有里子 (2006) 「~/~/てもらっていいですかという言い方 — 指示・依頼と許可求めの言語行為 —」 『言外と言内の交流分野 — 小泉保博士傘寿記念論文集 —』 pp.311-321 大学書林
- 宮地裕・甲斐睦朗・野村雅昭・萩野綱男編 (1995) 『日本語学』特集 依頼表現 10-14 明治書院
- 藤森弘子 (1997) 「不満表明ストラテジーの日英比較 — 談話完成テスト法の調査結果をもとに —」 『言語と文化の対話』 pp.243-247 英宝社
- 牧原功 (2008) 「不満表明・改善要求における配慮行動」 『群馬大学留学生センター論集』7 pp.51-60 群馬大学
- 守屋三千代 (2002) 「日本語の授受動詞と受益性 — 対照的な観点から —」 『日本語日本文学』12 pp.(1)-(22) 創価大学日本語日文学会
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現: — 日本語語用論入門 —』明治書院
- Apresjan, Y.D. (1969) Tolkovanija leksičeskikh značenij kak problema teoretičeskoj semantiki (意味論における語彙的な意味の記述の問題). *Izv. AN SSSR. Ser. lit. i jazyka.* 28, № 1, 11-23.
- Blum-Kulka, S. et al (1989) *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies.* Ablex Publishing Corporation.
- Boxer, D. and Cohen, A. (2004) *Studying Speaking to Inform Second Language Learning.* Multilingual Matters.
- Dmytrenko, O. L. (2009) *Dyrektyvni movlennievi akty v publicystychnomu dyskursi.* Avtoref.dys. ...

kand.filol.nauk (新聞記事における行為指示型発話行為:博士論文要約). Kyiv.nac.un-t im. T.Shevchenka.

Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman.

Mills, M. (1992) Strategiji obrašćenija s pros'boj na ruskom yazyke. *Russkij yazyk za rubežom* 3, 92-97.

Searle, J.R. *Expression and Meaning*. Cambridge University Press.

Timberlake, A. (2004) *A Reference Grammar of Russian*. Cambridge University Press.

Wierzbicka, A. (1985) Different cultures, different languages, different speech acts. *Journal of Pragmatics*. 9, 145-178.

Yoon, Y.B. and Kellogg, D. (2002) Ducks' and 'Parrots': Elaboration, Duplication and Duplicity in a Cartoon Discourse Completion Test. *Evaluation and Research in Education*16-4,218-239.

《資料》

調査で用いたスケッチ (日本語版/縮小したサイズ)

被験者に提示した状況の説明:二人の同期生(花子とみやび)は部活で稽古をします。あなたは「みやび」です。

